

語學新書の改竄本

龜田 次郎

一

鶴峰戊申の著述「語學新書」は、洋式日本文典の先驅として、國語學史上より見ても、また我洋學史上からいつても、注目すべきものであるが、此書が後年改竄されて、書名の改題丈では無く、著者名まで變更されて刊行されてゐるのである。今自分は、斯學研究の人に參考ともならうとおもつて、此事に關して本篇を草して、聊、卑見を述べる次第である。

二

本書「語學新書」上下二卷は、天保二年に出來て、同四年に刊行された様で、其初刊本の見返にも見える如く、一名「西洋假名必讀」といつたのであるが、元來、本書の原本は、「詞の品定」と名づけた二十卷本であつたのを抄略し

「語學新書」の改竄本（龜田）

たものである。其事は、門人尾張の齋藤春昌が、本書序説の初に、

此書もと詞の品定と名づけて、九品に九卷、九格に九卷、附録に二卷、すべて二十卷ありしを、さては受業のもの謄寫もたやからねば、同盟あひはかりて、つひに、師にこひて、本書のしげきを節して二卷となしつるを、名をもあらためて、語學新書はせられたるなり、

とあるので明かる。尤も、本書成功の前年文政十三年(改元天保元年)十一月に、「語學究理九品九格總括圖式」一冊刊行されてゐる。此一枚の圖表は、其末尾に、

このことは鏡を、よみかうがへ、これがかた木作らしめて、かつく世にほどこしそめたるは、木人いぬづかの正雄、野村の周等なりけり、

と記してある如く、門人達の上木したもので、又の名を「詞鏡」といつたのである。尙、本書「語學新書」にある二年十二月十五日尾張旅宿で記した自序中にも、

いまよりいつとせむとせむかしのことによりけむ、そがなかにことばがゝみといへるは、きびといぬづかのまさを、野むらともちから、すでにそのかた木つくらしめき、いまこのふみは、をはりびとよしをのほさだ、そのいへにものまなびする、いとうのはるまさにあとらへて、したしくおのれがさとせるまゝを、はぎがうへのつゆたがはず、うつしとらせたるになんあける、

と見えてゐるのでも知れる。

此圖表と新書との關係は丁度本居宣長翁の著述「紐鏡」と「詞の玉緒」、東條義門師の「和語説略圖」と「活語指南」のく、一目瞭然に要領を一枚の指掌圖に示し、これの註解書を別に作製した様なものである。此註解書ともいふべ

本書モト凡例ナシ、今童學ノタメニコレヲ書キ加フルモノゾ（凡例末尾）

第六通學捷法ニ語學新書有リ、助辭ニ九格アル事ヲ詳カニシ、讀書作文詠歌ノ要領スベテ藝文ノ活法ヲサトス、此部(八科捷法目録)

本居宣長翁著

立命館文學 第四卷 第八號

八三四

言葉乃丹しき 全二冊

東都書林 文岳堂樓

と記して著者名を變改して居る。下卷の奥附には、

京都	三條通榊屋町	出雲寺 文次郎
大	心齋橋通安堂寺町	秋田屋 太右衛門
三都	心齋橋通北久太郎町	河内屋 喜兵衛
阪	心齋橋通博勞町	河内屋 茂兵衛
江	日本橋通一町目	須原屋 茂兵衛
發行	淺草茅屋二町目	須原屋 伊八
	日本橋通二町目	山城屋 佐兵衛
	芝 神明 前	岡田屋 嘉七
書肆	同	和泉屋 吉兵衛
	下谷 御成道	英 文 藏
戸	芝飯倉五町目	萬 屋 忠 藏板

の三都書肆名が列記されてあるが、出板元は最尾の萬屋忠藏板とあるので明かる。此板元は「慶長以來書賣集覽」に、

萬屋忠藏 一貫堂 嘉永一慶應
江戸芝飯倉五丁目

とある家である。而して此改竄本は前掲の如くに、其書名の改題と著者名の變改とに止まらず、尙、進んで本文内容に及んでゐるのである。自分が改竄本といふのは此理由に依るのである。即、卷首天保四年上元日小山田與清の序、

同じ天保二年十二月十五日著者の自序、後刷本に添附追加した橘山地茂樹の凡例及目錄は元の儘に存し、卷末の橘山地茂樹の跋、著者の門人尾張齋藤春昌の序説、卷末の「續語學新書」副刻の廣告文及「八科捷法」目錄説明の全部を削除して、苟も著者に關係ある記事の箇所は皆、悉く除去し盡して居るのである。特に甚しいのは、上記小山田與清序文中に「鶴峰戊申翁」とあるを「本居宣長翁」に「語學新書」とあるを「言葉の錦」と變改してゐる事である。此他、本書の柱にあつた「○語學新書」の五字は、全部削去つたのは固よりで、尙序説、凡例、目錄、本文上下兩卷の各部首にあつた「語學新書」の四字をも皆、悉く削除して、只、其以下の文句のみを遺して印刷して居るのである。且、又、原刊本上下兩卷首最初二行には、

語學新書上(下)卷

中橋鶴峰先生著 門人尾張齋藤春昌校

であつたのを、

詞葉の錦上(下)卷

本居大人著 中橋鶴峰校

と變改してゐる。これが其改竄の最主要點である。單に、此一點のみからいへば、本居宣長著書の一偽作と認めらるべきものである。茲に、最後に於て特に注意しておかねばならぬのは、以上列舉した如く、數多の箇所を削除改竄を施して、世間の人士を瞞着したにも拘らず、折角苦心の拙策も、直に露はれて真相が觀破される事である。其は上記天保二年十二月十五日著者戊申の自序を全部其儘に遺してあるからである。即、此自序の最初に、

ことばまなびのあたらしぶみのはしがき

と記してゐるのは、明かに「語學新書」の和訓を示して居るし、已に上記抄出引用した本書より一年以前に刊行された「語學究理九品九格綜括圖式」の別名「詞の鏡」刻成の記事が見えてゐるのでわかるからである。況んや小山田與清序文中の著者名書名の變改や、上下兩卷本文初行の書名の變更の箇所板型入木の跡が、一目瞭然たるものがあるに於てをやである。

然らば、此改竄本は何時頃出來たか。又其刊行の由來徑路は如何といふ問題である。今、次に其事に就いて自分の管見を述べよう。

改竄本には、何等刊行年月を記さず、只、出版書肆名が見える丈であるが、自分の見る所では、此改竄本は、其裝釘や用紙其他の點から考察して、幕末、萬延文久兩年間の刊行であらうとおもふ。其は改竄を施すに際して、少くとも本書に關係ある主要人物の在世中は德義上からいつても到底出來ない。其歿後に於て行はねばならぬ。島田易清、橘山地茂樹、齋藤春昌、利光宗規諸氏の事は未詳であるが、さしたる縣念も影響も無いから打捨置いて、他の大家達の上を考慮した様である。然るに、著者戊申は、安政六年八月二十四日享年七十二で歿して居る。又序文の作者小山田典清は、弘化四年三月二十五日享年六十五で歿して居る。新に變改して著者とした本居宣長は、已に遠く享和元年九月二十九日享年七十二で世を去つて居るし、其嫡嗣の本居春庭も、亦早く文政十一年十一月七日享年六十六で歿して居るし、又宣長の養嗣本居大平は、天保四年九月十一日享年七十八、其養嗣本居内遠は安政二年十月四日享年六十四で歿して居る。斯く累世の國學大家一門も大分代を更へて時代が隔つてゐる。最早、關係ある主要人物に對して餘

り遠慮や懸念を要する事が無くなつたので、時代からいへば、最後に世を去つた著者戊申の歿後、即、安政六年八以後に改竄刊行したと考へる。それで自分は其装釘、用紙の上から觀察し、又上記本書關係の主要學者死歿年代のから考察して、斯く斷言するのである。改竄本には刊行年月が見えないが、板元の書肆名は見えてゐるので、上「慶長以來書賈集覽」に示す此板元書肆の營業年代から見ても、自分の斷定は謬が無く當を得たものであらうと信ずるのである。

次に書名改題の事である。元來、本書「語學新書」は、當時勃興した和蘭文法に範を採り、其知識を以て全く言語統の異つた我國語を律しようとするのであるから、柄鑿相容れざる所があるのは當然である。而も分類も煩瑣であつた彼の語法文則も充分に消化されず、極めて未熟の點が多い。縱、引例は邦文を主としたにしろ、また漢文の用法をけてある場合も少くない。斯る不備の點ある文典が、未、一般に洋語の知識普及しない時代に於て、世に容れられいのは正に然る所で、只斬新奇抜といふ様に認められたに過ぎないのであつた。況して時は徳川幕府多事多難の世而も國學隆盛時代である。本書が國學者に無論受け容れられず、從うて廣く世に流布しなかつたのは無理ならぬのである。然るに本書刊行當時は本居一派の學風は全國に蔓延り、其門に出た平田篤胤の學説は正に天下を風靡してゐる時代である。是に於てか、錙銖の利を爭ふ書肆が、本書に關係ある主要人物の物故後に就て、何等かの方法手配講じて、其弘布を冀ふのは尤の事である。已に本居宜長春庭父子には「詞の玉緒」、「詞の八衢」、「詞の通路」等の語書が刊行されて廣く行はれてゐる。加之、同じ本居家では、内遠が嘉永四年九月二十三、四兩日、吹上寺で荷田東契沖、賀茂真淵の先哲、及宜長、大平、二先人の遺墨展覽會を開催し、同年十二月其二大人の遺筆のみを縮寫して一

葉錦」二卷を刊行してゐる。それで此等本居累代の著書名からおもひついて、改竄本に命名して「詞の錦」と稱したと考へる。書肆の奸策に基く所爲や惡むべきで、而も地下の故人にまで其累を及し、延いては後人を過らす所大なるものあるは痛歎に堪へぬ次第である。

徳川時代や現代に於ても原著を後刷本に改題した例は、各方面にいくらかもある。吾々專攻の語學關係のものについて、本書と同時代のもの二三を挙げれば、山崎美成の「文教溫故」(文政十一年刊)が「好古餘錄」、大藏永常の「文章假字用格」(天保四年刊)が「雅俗早引節用集」、服部宣の「名言通」(天保六年刊)が「和訓六帖」の類である。他に類例は幾らもある。然し單に改題のみに止まらず、内容まで改竄し、而も著者名まで全く無關係の人に附會して、敢て變改を施して刊行した本書の如きは、稀有の事に屬し、他に其例を見ない所である。一書肆の不徳義な行爲から起つたとはいへ、原著者の名を傷けることも亦少くないとおもふ。悲しむべき事である。

想ひ起すと最早三十年餘にもなるが、今の史料編纂掛に在る岩橋小彌太君が、當時在住の東京本郷區東片町の僑居附近の一古道具店に此改竄本のあつたのを購求されて、互に其改竄に驚いた事があり、又其際、今の福井久藏博士が「日本文法史」を撰述の折であつたので、自分は此由を氏に告げた事もあつた、それで氏の著述にも記るされてあつたかとおもふ。又自分も、此改竄本は所蔵してゐるが、尙外に已に二十有餘年前獲得したのに、本書の外題は原刊本の儘で只本文の初行の書名文が改題してある一冊合刊本もあつた。此本は故小杉楳村博士の舊藏であつたが、其後知人某氏に割愛して仕舞つた。これも一種の改竄本である。他に異本が存在するかも知れない。それは今後の調査に俟つ次第である。今自分は現今手許に所蔵するものに依て本篇を草したのである。

以上叙述した所で、改竄本の概略はわかつたとおもふ。近時古刊本の其原刊本や、後刷本や、將改刻本について諸方に種々の面白い事柄が發表される様である。それで自分も其專攻の國語學書の側で、而も範を和蘭文法に採つた洋式我國語文典の嚆矢、「語學新書」の改竄本「詞葉の錦」の一書が存在する事を述べて同好の士に示す譯である。又此改竄本の事は、赤堀又次郎氏の名著「國語學書目解題」や、佐村八郎氏の好著「國書解題」を初め、諸種の解題書にも、何等見え無い様であるし、世間一般には、無論知れてゐない事でもあるから、茲に、此一篇を物した次第である。

(昭和十二年五月十日稿)